

能登半島地震介護応援派遣について

マナハウス 3 階 末永千佳子

3月8日～3月19日までの12日間(移動日を含む)石川県鳳珠郡穴水町にある、朱鷺の苑グループホームへ介護支援に行きました。穴水町の山奥にある施設で、山を下りるとすぐ目の前には海が見え、同じ敷地内には児童養護施設やデイサービス施設、養護施設もあり、豊かな自然に囲まれたとても大きな施設でした。

施設に着いてまず目に留まったのは、施設の玄関や通路に積み重なった沢山の支援物資でした。飲み物や食べ物以外にも、衣類やカイロ、灯油等種類は様々で、全国から集まった沢山の支援物資の段ボールには、能登の復興を願うメッセージが書かれていました。私が行った時には水やガス、電気も使える状態でしたが、震災当初は水もガスも電気も使えず、食事も用意できない為、僅かなおにぎりやお粥だけの生活が続いていたそうです。

隣接された養護施設の新館は全壊で、今も立ち入り禁止になっており、敷地内の道路はひび割れ、大きな段差ができ、建物内には破損された箇所がいくつもある状態で、復旧にはまだまだ時間がかかると言われていました。

また、震災後は入居者の精神面での負担が大きかったと言います。普段穏やかで温厚な方が震災直後から、暴力的になったり、気分の浮き沈みが目立つようになったり、眠れなくなる等の変化が大きく表れたそうです。職員の方も入居者と共に被災されてある為、怖い思いは共有し、寄り添う事、気持ちが沈みすぎない様お互いに声を掛け合ったそうです。

「1～2月までは生活するのがやっとだった。3月になって少しずつだけ普通の日常に戻ってきた。それでもやっぱり何から手をつけていいのかわからないのが現状で、職員の中には帰る家がなくなった人や、やむを得ず退職した人もいます。」と、石川の職員の方が話してくださいました。

私が介護支援に行った時にはある程度のライフラインが確保されており、話で聞く様な大変な思いを経験したり、身をもって体験したりする事はありませんでしたが、頂いた休みを使って被害が大きかった穴水町へ行ってみると、全壊した家屋やひび割れた道路、整備が追いつかず通行止めになっている場所や、遠方から応援に来られた方、沢山の自衛隊員の方を目にしました。悲惨な現状を目の当たりにして、正直怖かったです。ニュースで見っていたあの映像を、映像ではなく実際に自分の目で見て、被災された方の話を直接聞く事で、どこか他人事だった気持ちが消え、「自分は被災地にいる、同じ日本で大変な思いをしている人がいる」とやっと実感する事が出来ました。

大変な中でも穴水の方々はとても元気で明るく、応援に行った私が励まされる事ばかりでした。毎朝グループホームの皆さんに挨拶をすると、私の顔を見て、「お姉ちゃんおはようさん、今日もよろしくね」「今日も楽しく頑張ろうね」「あなたの顔見たら元気出たわ、いい一日になりそうやわ～」と朝から沢山温かい声を掛けてくれました。余暇時間では穴水音頭をみんなで歌って、歌に合わせて手拍子をしたり、踊りを踊ったりと楽しい時間を一緒に過ごしました。また、グループホームにはお話し好きな入居者様が多く、お孫さんの話や、昔海外旅行に行った話、震災当日の話など、沢山のお話を聞かせてくれました。

入居者の方は100歳近い超高齢の方が多かったですが、皆さん自立度がとても高く、茶碗洗いやテーブル拭き、入浴もほとんどご自分でされる方ばかりでした。明るくて活気があり、優しくて可愛いグループホ

ームの皆さんと、何か一緒に思い出を作りたいと思い、施設にあった模造紙や折り紙をお借りして、壁面を製作しました。能登半島の復興、穴水の復興、朱鷺の苑の皆さんの健康と長寿を願って、桜の木を作りました。完成した桜の木を見て「綺麗やわ〜」「まさかここで桜がみれるとは思わなかった」「いい物作ってくれてお姉ちゃんに感謝やわ」と喜んで下さり、皆さんの笑顔が見られてすごく嬉しかったです。

私が福岡へ帰る日、グループホームの皆さんが別れの挨拶にと「ふるさと」を歌ってくれました。玄関までお見送りをして下さる方もいて、「遠い所からありがとうね」「また来てね」と何度も声をかけてくれました。

震災で大変な思いをされた石川の方には、失礼な言い方に聞こえてしまうかもしれませんが、自分がマナハウスで学んだ技術や知識が、石川に行ってもちゃんと通用した事、そして困っている人の役に立てた事が素直にうれしかったし、介護士として今の自分に何ができるのか見つめ直した12日間でした。

被災地に行って介護支援をするという貴重な経験をさせて頂いた事、背中を押してくれた職場の先輩方や、サポートしてくれたマナハウスには本当に感謝しています。

最後に、能登半島の日も早い復興と心身のご健康を心からお祈りいたします。